再生から、共生へ。

【岩手県陸前高田】戸羽 太 市長インタビュー

コトノネ巻頭インタビュー

SPECIAL INTERVIEW FUTOSHI TOBA

一瞬にして、津波が、いのちを、街を、暮らしを連れ去った。
愛する人が埋もれているかもしれないのに、
すべてひっくるめて瓦礫と呼ばれる切なさ。
その不安から逃れられた人も、その逃れたことで逆に傷つくかなしさよ。
生まれ育った街を離れたくない人、離れたくないけれど移りゆく人、
離れたいけれど、離れられない人。
さまざまな思いと、さまざまな人が、ともに暮らせる街づくりとは…。
津波を乗り越え、鎮魂の想い深く、
戸羽市長は「八年後の暮らしづくり」に歩みだした。

七万本の松の木で有名な陸前高田の
松原は、津波で流され一本だけ残った。
復興の象徴となった。

陸前高田の気仙町には
福来旗（大漁旗）と黄色いハンカチが風にそよぐ。
市民の復興への願いが込められている。

石川 梵＝写真（p.10-11）
photograph by Bon Ishikawa
岸本 剛＝写真（p.12-16）
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

昔のままに、炭焼きの煙が上る山。

前日よりも、気温が一〇度も下がった二〇一一年二月三〇日、陸前高田を訪ねた。山並みの霧が徐々に薄れて、ところどころに、杉のようにまっすぐ立ち上っていた。それは霧ではなく炭焼きの煙だと、地元の人が教えてくれた。のんびりと見つめてしまう風景だ。すでに、山は、昔のままに戻っていた。

でも、車が山並みを抜けると、いきなり、瓦礫と裸の土地が広がった。市庁舎も博物館もホテルも、遠くから見

ると、躯体は空をバックに切抜きのように建っている。近づくと、天井や窓の残骸が垂れ下がっている。

瓦礫はまとめられて、いくつもの台地になっている。その上をトラックが行き交う広さ。台地のすそ野は、すでに草が覆っている。それだけが、震災から、すでに九ヵ月過ぎたことを感じさせる。頑丈なビルには、解体の作業も手がついていない。舗装された道路も、傾き凹み、急に車が跳ね上がる。

海岸線から少し山道を上ったところに、陸前高田のプレハブの市庁舎があった。

想定外の被災に、規定内の対応。

戸羽市長は、色つやのいい顔、にこやかな表情で迎えてくれた。本題に入る前に、三月一一日以降、お休みは取られたのですか、とのんきな質問をすると、「私だけでなく、休みはほとんどない。いや、むしろ、職員も休みが怖いでしょう」との答えが返ってきた。家にひとりになるのが、つらい。自然と、失った人への想いになる。「私の小学生の息子は助かりましたが、その友達は亡くなりました。その友達は職員の息子さんです」。

ここまで生き延びてくるのにも、陸前高田の人は大変だったのだろう。戸羽市長が書かれた『被災地の本当の話をしよう』(二〇一一年八月二五日、ワニブックス刊)にも、その困難な戦いが記されている。救援物資が届きだしたのは、震災後一週間後ぐらい。水や食糧は、何とかしのげるようになったけれど、ガソリンがない。家族を捜して遺体安置所を回ることもできない。国に強引に頼み込んで、やっとガソリンが届いたと思ったら、救援の自衛隊に給油させることはまかりならぬというお達し。「このガソリンは他の省庁から出ているものだから、自衛隊が給油してはダメだ。運ぶところまでは認めるけど、自衛隊にノズルを触らせてはならない」。なんなんだ、これは! 瓦礫を回収しても、処理が進まない。業者も津波被害を受けている。瓦礫処理専門プラントを造りたい、と県に掛け合ったけれど、建設の許可がすぐに出ても建設開始までに二年はかかる、と言う返答。国や県などへの必死の要請は、「法律」「慣例」「前例」の壁に阻まれる。津波は想定外でも、対応は平時の規定内。濡れ布団を引きずるように歩きだそうとする人に、さらに水をぶっかける人がいる。

日本中に広がる市長コミュニティ。

助け舟は、思わぬところからきた。行政の縦のつながりではなく、横のつながりだった。五月三日に、全国青年市長会のメンバー、三重県松阪市長・山中光茂さんから電話が入る。「五月五日に全国青年市長会の会合を開くから、来ないか」という誘いだった。五月五日は、こどもの日。震災後、初めての休日をとる予定だった。こどもにも、つらい思いをさせている。この日を外すと、もういつ取れるかもわからない。「ただの親睦会だと思っていたから、正直、気が進まなかった」。けれど、代理でもいい、と懇請されて、「職員を出すのはしのびないので、結局、参加した。でも、参加して本当によかった」。それは、被災地を支援するための会合だった。「全国青年市長会の六〇市から、どれほど助けてもらっているか」。現在も継続して、三ヵ月単位で職員を派遣してもらっている。「この会合が縁で、陸前高田市の参与として参画していただいているワタミグループの渡邉美樹さんや白鷗大学の教授・福岡政行さんなど、多くの協力者を得ることができました」。

同じころ、名古屋市の河村たかし市長からも、電話が入った。河村市長は、いきなり「職員を一〇〇〇人までは派遣できる準備がある」と切りだした。陸前高田市役所の職員数は約三〇〇名。感激したけれど、「それでは市役所が乗っ取られてしまう」と答えて、約三〇人の方を派遣してもらうことになった。決して、俗にいう「助っ人」ではない。市の正規の職員と同じように活躍している、という。戸羽市長が、二八歳まで育った町田市からも、大きな支援があった。小学校、中学校、高校の同窓生が「町田 鶴の羽の会」というグループを結成して、さまざまな支援に動いてくれている。町田市中の市民にも知られて、支援の輪が広がった。

「私たちのことを、忘れないで」。

まは、まだ支援がある。けれど、人はいつか日常に紛れて忘れていく。新聞やテレビで報道をされなくなる。たまに、報道されても、記事は小さくなっている。それに、どちらかと言えば、希望を感じる記事が増える。「もう、一時の混乱は抜けだした。被災

SPECIAL INTERVIEW FUTOSHI TOBA

地にも日常が戻り始めた」。そのような希望に満ちた記事の方が、全国の人にも歓迎されるだろう。「次に、大きく取り上げられるのは、一年後の三月一一日だ。その翌年には、記念日のようになって、そのとき、思い出されるだけになる」。

「忘れられることが、いちばん怖い」。でも、誰にも関心をもってもらうのは、難しい。だから、「全国青年市長会の市や町田市など、今回、支援をいただいた方々との絆を大切にしていきたい。この絆を切らないようにしたい」と、戸羽市長は強い口調で言った。そのためには、どんな繁忙の中でも、戸羽市長が出向いて陸前高田の実情を伝えていくという。

さらに、「これからは、ただ支援をお願いするだけでなく、支援していただける方にも、もっと達成感のあるやり方にしたい」。たとえば、「海岸地区に花を植えて、四季をたのしめるようにしたい」「津波が押し寄せた範囲がわかるように、桜並木を植える」とか、具体的に訴えて義援金を募る。支援の「見える化」に工夫したい。それが、支援者の納得感や達成感を生み、さらに、一度、見に行こうと思って、観光にもつながるかもしれない。それは、「お金」につながるだけでなく、「人の輪」を広げることになる。

減災と先進リハビリのコンパクトシティ。

訪ねた日に、陸前高田の復興のためのマスタープランができた。五〇人のメンバーからなる「復興計画検討委員会」で五回の討議を重ね、提案書がまとまったのだ。一二月議会（二〇一一年）でこの構想案が審議され、それに基づいて具体的な実施計画に移る。

戸羽市長は、マスタープランを示して説明してくれた。まずは、大切なのは、「いのち」を守ること。そのための減災プラン。海岸地区を避け、高台に新市街をつくる。鉄道も高台に移す。防潮堤は、震災前は高さ五・五メートル。これは流されてしまった。新しい防潮堤の高さは一二・五メートルにする。

道路づくりも、工夫する。緊急時に、スムーズに避難するために、道路を太くするだけではない。「道が分かれるとき、どちらの道に行けばいいのか、迷ってしまう人がいた。迷って時間を取る。迷いが渋滞を生むことになる」。だから、「山に近い道に、誘導のために色を付けておくなど、さまざまな分野の専門家に知恵を借り、特徴ある取り組みを進めていきたい」。被災地の辛い経験が、歴史の中に埋もれず、日本全体の知恵となるように復興させたい、と戸羽市長は意気込む。

戸羽市長は著書でも語っているが、マスタープランのもう一つの核は、「病院を中心に福祉の充実」だ。陸前高田市の高齢者は、三五％になる。お年寄りも弱者も住みやすく、暮らしの動線をスムーズにつなげた街づくりを目指している。いわば「コンパクトシティ」の発想だ。

さらに、病院は、世界でも誇れるサービスを特色にしたい。それは、先進的なリハビリ技術、設備だ。「太陽光発電を陸前高田にという提案も受けている。これを活用して、市内循環の電気バスを走らせることも検討していきたい」。のどかな自然の中で、ゆったりと老後を過ごせる街を実現する。合わせて、生活基盤となる雇用も促進したい。戸羽市長の思う陸前高田は、復興ではなく、新生だ。

「ノーマライゼーションを死語にしたい」。

戸羽市長が、本当に実現したいのは、「復興でも、再生でもなく、共生としての新生」なのだ。戸羽市長は、突然、若いころのアメリカでの留学経験を話しだした。三年間暮らした。そのとき、大きなショックを受けた。どこに行っても、障害者がいる。「今風に言えばクラブと言うのでしょうか。ディスコに行っても、障害者がいる。臍から下のない人が当たり前に車いすに乗って、レストランやディスコに出かけていく」。日本では見かけたことはない。もっと驚くのが、その光景が、自然だったこと。周りの人もまったく気にかけていない。

日本では、どうか？　いままでの陸前高田なら、「お店をのぞいて、車いすでも大丈夫ですか、といちいち確認しなければいけない」。一〇〇〇人生まれたら、五人は何らかの障害を持って生まれる、と言われている。生まれることが自然な人たちは、街にいること、働いていること、すべて自然なはずなのに。「ノーマライゼーションという言葉を言ったり、聞いたりしているうちは、まだまだノーマライゼーションの社会ではない」。だから、「私は、陸前高田の街から、ノーマライゼーションという言葉をなくしたい」。戸羽市長の進めるマスタープランの基礎は、「生まれてたすべてのいのちとの共生」なのだ。

「いのち」あることのありがたさに、目覚めた。

共生の街づくりは、いまなら実現できる。歩みだせる。なぜか。悲しいことに、「街がゼロ」になったからだ。新しくつくるなら、公共施設だけでなく、すべての店やビルもバリアフリーにできる。補助金を出して、促進することもできる。

それよりも大きなことは、市民の意識だ。「いのちの尊さを、いのちをかけて実感した」からだ。

「市民の皆さんは、震災から、なんとか生き延びた」。でも、家族や親族や友

SPECIAL INTERVIEW FUTOSHI TOBA

人を亡くした人も多い。小学生で亡くなったこどもは、風邪をひいたりして、家にいた子が多い。登校していたこどもたちは、寄せる津波の恐怖は味わったが、ほとんどは逃げ延びた。その生と死を分けたのは、偶然だったという想いも深い。

そのあとも、一切れのパンを分け合うように、生きてきた。「今日を生きるありがたさ。三月一一日まで、当たり前だったことのありがたさを身に染みて知っている」。それが、陸前高田の人たちの心の原点だ。助けることによって、助けられる。「いのちあるものは、すべて仲間なのだ」。この想いが深いうちに、陸前高田の復興をスタートしたい、と戸羽市長は、一段と言葉に力を込めた。

「私は、『世界の人に誇れる美しい街にしたい』と言って、市長になりました。風景は、いまのままで美しい。本当に誇らなくてはいけないのは、気持ちです。気持ちが美しい街です」。

「一〇年後ではなく、八年後の復興」。戸羽市長の、二年でも早めたいという隠れた意図を聞いた気がした。

「奇跡の一本松」が見届けたマスタープラン。

取材を終えて、四日目。「奇跡の一本松」の立ち枯れのニュースが流れた。戸羽市長は、著書で語っていた。「正直な話をすれば、当初、私はこの一本松を復興のシンボルにすることにあまり乗り気ではありませんでした。たしかにあれだけの大災害でしたたかに生き残った生命力は、たくさんの市民に勇気と希望を与えてくれました。それだけに、もしあの松の木が枯れてしまったり、折れてしまったりしたら、復興に前向きになっていた皆さんもショックを受けるでしょうし、町全体の士気が下がってしまうのではないかと危惧したからです」。

深い洞察だ。不幸にして、戸羽市長の危惧は的中した。けれど、「奇跡の一本松」は枯れても、その間に準備したマスタープランが、もうすぐ歩きだそうとしている。その街は、日本国中の障害者が待ちわびる街だ。いや、心のうちでは、誰もが求めていた街だ。「世界に誇れる美しい街。風景だけでなく、心まで美しい街にしたい」。そのとき、陸前高田は、日本人の「ふるさと」になる。（文責：編集部）

SPECIAL INTERVIEW FUTOSHI TOBA

戸羽 太【とば ふとし】

1965年神奈川県松田町生まれ。幼少期から28歳まで、東京・町田市で過ごす。28歳のとき、父の地元である陸前高田に移住。陸前高田市議会議員、市役所助役を経て、2011年2月6日、市長に当選。就任1ヵ月後、東日本大震災が発生。妻を亡くしながらも、陸前高田の再生に向けて邁進している。二男あり。